



クリスマスメッセージ

限りない「プレゼント」



チャブレン 市原 信太郎



チャペルの学年礼拝でもすでに同じ質問をしましたが、皆さん本当にクリスマスは楽しみですか？

幼稚園や保育園に通うような小さな子どもを見てみると、本当にクリスマスが心底楽しみらしく、「早く十二月にならないかなあ」などと十月くらいから言っていたりします。特にサンタクロースがプレゼントを持ってきてくれる、というのが大きな楽しみのお坊さんです。お寺のお坊さんをしてる友人に聞いても、やはり家庭ではクリスマスを祝うのだそうです。確かに、自分の生まれた家の宗教のおかげで、もらえるプレゼントが一つ減るといふことになったら、子どもとしては悲しいですし、皆さんも、もうクリスマスにフライドチキンを食べる喜び、という時期は過ぎてしまっても、またサンタクロースもすでに来なくなつたかもしれないですが、しかしそれでもなおプレゼントをもらうという事には未だに大きな期待感があるのではないのでしょうか。

図書館の掲示板に「空想科学 図書館通信」というのが掲示されているのを見たことがありますか。『空想科学読本』シリーズの著者が全国の図書館向けに出している壁新聞で、アニメや戦隊物などについての質問に、科学的に真面目に答えるという内容です。わたしはこれを読むのをとても楽しみにしているのですが、最新の通信には「サンタクロースは住

居不法侵入にならないのですか？」という質問がありました。答も面白くて、「お父さんお母さんはサンタの訪問を歓迎しているに違いないから、不法侵入にはならない。ただし出入国管理法違反」というものでした。「サンタクロースってなんでしようか？」という有名な本もあります。もう百年以上も前に、アメリカで八歳の女の子が新聞社に送ったこの質問に、記者がとても素晴らしい返事を書いて社説として掲載されたものが、いまだに読み継がれています。その中で記者は、目に見えないものこそ最も確かなものなのだ、と語っています。

プレゼントの話をしてきましたが、英語の present という単語は大きく分けると二つの意味があり、一つは贈り物、そしてもう一つは「そこに居る」という意味です。両者とも同じラテン語の単語が語源で、「前に持つてくる」から「贈り物」、「前に居る、ある」から「そこに居合わせる」という意味が出てきています。このことは、クリスマスの意味を考える上で重要なヒントになるのではないかと思います。

クリスマス劇をする时必须出てくる情景の一つは、いわゆる「三人の博士」の訪問です。実は聖書には「三人」とも「博士」とも書いてないのですが、この場面はクリスマスプレゼントの起源とも言われています。博士たちは確かに黄金・没薬・乳香

を持って行ったわけですが、贈り物をしたことは間違いありません。また、羊飼いたちがイエスを訪ねるという場面も必ず取り入れられています。この羊飼いたちはどうやら手ぶらで訪問したようです。いったい何のために、職場放棄までしてイエスを訪問したのでしようか。

ヨハネによる福音書の著者は、大胆にも「いまだかつて神を見た者はいません」と書き記しました。聖書を書いた人がそう言っているのはすごいことです。しかし、わたしたちが互いに愛し合う姿のうちに、愛である神を知ることができると言うのが彼の確信でした。サンタクロースも同じです。わたしたちのどれ一人としてサンタクロースに直接会った人はいないでしょうが、子どもの時サンタクロースの存在を信じたのは、サンタクロースがプレゼントを置いていくのを目撃したからではなく、朝起きた時枕元に置かれていたプレゼントを通してだったはず。サンタクロースの訪問を歓迎してくれる家族の愛が、「プレゼント」が「そこに居る」ことを通して現れたのです。

人が「そこに居る」ことの限りない価値を認めない力は闇の力です。しかしどんなに闇の力が強くとも、「そこに居る」光に打ち勝つことは決してできないというのがクリスマスメッセージだと思えます。君たち一人一人が何か「できる」ことのゆえにはなく、「そこに居る」ことが大切にされ、そしてお互いを大切にしよう世界を心から願います。

この冬休みに、岩手県の釜石を訪問してワークキャンプを行います。愛する人が「そこに居る」ことを突然奪われた方々の喪失感、察するに余りあります。そこを訪問する度、ある種の無力感を感じざるを得ません。しかし「訪れる」とはクリスマス最大の重要なモチーフでもあります。何とできないわたしたちが、その場に身を置くこと。「そこに居る」ことを通してこの世界に神が働いてくださることを、羊飼いや東の博士たちのように素朴に信じたいと思います。

ハーフマラソンを完走して 高校二年一組 青山 大海

先月11月23日、高二生は府中多摩川マラソンに参加した。私はハーフマラソンを選んだが、21kmという距離に対して不安な気持ち一杯だった。数日前に拗らせた風邪が完治していなかったこともそうだが、やはり精神的な面が心配だった。

私は陸上競技部に所属していて長距離種目を中心に活動している。長い距離は走り慣れてるつもりだったが、当日は未知の領域に挑戦することに少なからず恐怖感を抱いていた。中途半端な気持ちで走るのは絶対嫌だということだわりが自分自身にプレッシャーをかけていたのかもしれない。

号砲が鳴り150人近い選手が一齐にスタートした。部活動の大会と比べて一番違っていたのは、走っている最中に様々なことを考える速度で走っているのか、このまま進んで目標を達成できるのだろうか等、不慣れた距離に途中何度も心が折れそうになったが、陸上部のメンバーとの励まし合い、沿道の先生や保護



者の方の応援が支えになり、最後まで納得のいく走りが出た。長距離走は日常生活と似ている部分があると思う。マラソンと同様に苦しい時は沢山あるが、その時に妥協してしまうと達成感を得られず後悔だけが残ってしまう。また一人の判断では間違った方向に進んでしまいう時があるので周囲の助けが必要である。高校二年生も残り三ヶ月となった。最高学年になると大変な事も多いと思うが、学年で協力しながら何事も諦めずに乗り越えていきたいと思っている。

中学一年便り

お弁当から考える

お昼の時間、みんなの色とりどりのお弁当を見たり、お弁当への感想を聞くのが、最近とても楽しみである。

おにぎり、サンドイッチ、からあげにミートボール、美味しそうだなあと見ていると、うどん、ラーメン、とこれまたうらやましくなるバリエーション。

教室内では、ラーメンいいなあとという声があちこちから上がったたり、デザートをおすそわけしたりと、お弁当へのみんなの関心も絶えない様子である。

当然であるが、みんなは家を出て(ひとり)で学校にやってくる。学校にいる間は、家から出て(ひとり)の時間を過ごしている。そのようなみんなのお弁当には、さまざまに思いがこもっているのではないだろうか。

「今日も勉強に部活にがんばってね」「好きなおかずいれておいたから」

お弁当は、みんなを後押ししてくれているのである。「今日は売店で買ってね」という日もあるかもしれないが、それもまたメッセージであると思う。

入学してから八ヶ月間のみんなの(ひとり)の時間のために、さまざまな人の手間ひまがかけられてきている。すべてを感じとることとは簡単ではないかもしれないが、みんなはそれに対してどのように応えていることができるだろうか。

(正村多佳子)

中学二年便り

「メロス」と「当たり前」

あるクラスの国語の授業中に、「走れメロス」の平常チエックを行った。

私もその際、「テストのつもりでやるように。終わっても絶対に他の人と話をすな」と言っていた。開始した授業では、結構にぎやかなクラスなので、私は細かく注意するつもりでいた。

しかし、全く私語はなかった。私は一度も注意をしなかった。私はそのクラスをほめた。組主任の後藤先生にもその立派な姿勢について伝えた。

次の時間、後藤先生は、ロングホームルームで、私の授業の件を伝えたと。生徒はこう言ったらいい。「テストだから当たり前じゃないですか」

私は、さらに感心した。入学して一年と七か月経た。君たちは、テストは静かにするのは当たり前と言っている。他の二クラスもすっかり行え、学年全員ができた。

国語でシラーの「人質」と太宰治の「走れメロス」の比較をして学習していた。特に、比べていく内に太宰の「メロス」は人間的な弱さを持っていることが明らかになっていった。

人間的な弱さは誰にでもある。つい楽をしようとしてたり、うそをついてしまったり、ルールを破ってしまったりする。その弱さを乗り越えてメロスはたどり着いた。「テストだから当たり前じゃないですか」と言っている。中二全員がこう言えるように。

(飯高雅彦)

中学三年便り

自分と話し合ってみる

今年も残り少なくなりました。君たちにとって、今年は何のような年であったでしょうか。

中期は体育祭や文化祭などの行事がたくさんあり、それぞれ何かしら打ち込めた物があるかと思えます。楽しかった記憶、つらかった記憶、辛い中からの充実した記憶など、中学生生活の集大成ができたのではないのでしょうか。

しかし、中学生生活が終わるといってはまだまだ実感がわかないのではないのでしょうか。教員は変わらず、校舎も変わらず、制服も変わらず、ただ中学四年生になっただけのように感じる者も少なくないでしょう。ですが、社会的には大きく変わります。

義務教育から外れるということは自ら志して勉学に励むということになります。今まで全ての科目においてハードルが上がってきます。

それだけ自分で勉強をしつかりと管理しなくてはならなくなります。その代わり、自由度も増して携帯電話やゲームなどの持ち込みも出来るようになるわけですが、持ち込みが出来るといって授業中に講義を聞かないでツイッターやゲームばかりしていつかは意味のないのは自明ですね。

すなわち「自律」をしつかり行わなくてはなりません。折角ですからこの冬休み期間中に一時間自分をみつめ直す時間を作ってください。そして自分が一年後、三年後、十年後どのようになっているか考えてみてください。

(對馬 剛)

高校一年便り

高校時代について

漫画家の矢口高雄(代表作『釣りキチ三平』)さんの作品には自伝的要素を踏まえた作品、特に田舎での小学校・中学校時代をエッセイ風に描いたものが多いのだが、高校時代を描いた作品がほとんどない。

理由として、矢口さんは、「自分はいわゆる優等生であり、その名目のまえに臆病になっていった。周囲の期待に応えようとする中で情緒的に不安定だった。その結果として高校時代の記憶がポツカリ抜けてしまったのではないかと語る。

実は私も記憶がないということにおいて全く同様なのである(私も場合、少なくとも優等生でなく、むしろ……)。

断片的な記憶はあるものの、全体的に脈絡のない絵しか結ばない。概念上のコロッケが見つめるべき細部を持たないことと同様か。

思えば様々な困難を抱え、自分自身への期待は膨らみつつ、日本史の問題集を買ってきてもやけにナウマン象に詳しくなっていたあの頃(でも、前期・中期旧石器時代について学んだことは後に覆されてしまうのだけれど……)。

この短い文章で言いたかったのは、高校時代って、もしかしたら楽しいばかりではなく、おそらくみんな何かで苦しむ、人生の中で割と暗い時代かもしれないということである。

悩みを抱え、どうしようもないときもあるが、それと向き合っている時なのではないか、ということ。

(高橋 整)

高校二年便り

核

「自分の核になるものを作らなさい。それが自信になるはずだ。」

学生時代、指導教授にこんなことを言われたのを思い出す。「核」。自分の得意なもの。誰にも負けないもの。自分を形成するもの。

自分は運動能力が秀でていなくてもない。音楽ができるわけでもない。何かしらの才能があるわけでもない。さあ、核になるものなんてあるだろうか。このままだと、何に対しても自信が持てなくなるのは必至。ふと、立ち止まって、悩んだ時期もある。

「よし、核は漢文だ！」漢文を専攻していると、周囲から「変わってる」と思われることが多い。「かっこいい」と思われることはまずない。それでも自分にはこれしかないと思えば、無我夢中に取り組んだ。

社会に出ると、やらなければいけないことがたくさんある。できないこともたくさんある。

でも、「核」があれば、「自分にはこれがあるから大丈夫」と思える。決して逃げではない。「核」は自信を、そして何事にも前向きに取り組む姿勢を与えてくれる。

高校二年生の君たちに残された学校生活も実質一年の中で、「自分の核」となり得るものを見つけ、次のステージへの準備としてほしい。

(永田真一)

高校三年便り

高校生活もあと僅か

立教池袋での生活もあと僅かになったが、高校生活は如何だっただろうか。君たちは身体のみならず、精神的にも大きな成長があったと思う。三年前は何も将来について何も考えていなかった者も、自分自身で大学・学部を選び決定できるまでに成長した。毎日の学友会活動も結果はそれぞれまちまちだったが、その練習や活動の過程では、誰もが納得できるまで頑張れた。

この間、学校の環境も大きく変化した。慣れ親しんだ週五日制から週六日制に移行し、戸惑ったのではないかと。また、昨年の四月からの新体育館、新校舎建設ではケヤキの下の朝礼が、放送に変わった。また、体育館、プール剣道場、プレイコートが壊され、グラウンドが狭くなり、授業や学

友会で体育活動が制約された。体育祭も外部の施設を使用しなければならなかった。様々なことで苦労があった。体育科の教員陣もどうしようか大変悩んだが、君たちにはもつと大きな苦労になってしまったと思う。そのひとつひとつを乗り越えてきた。

まだこれから先、艱難辛苦にぶつかる事は多々あると思うが、立教池袋で経験・学んだことは将来自信を持って何事にも対応できることと信じている。さらに大きな飛躍を期待したい。

卒業時の言葉になってしまったが、あと三ヶ月「立つ鳥跡を濁さず」でお願いしたい。

(岸 博克)



今月の聖句

荒れ野で叫ぶ者の声がする。

「主の道を整え、その道筋をまつすぐにせよ。」

(マルコ1:3)

新約聖書最古の福音書であるマルコ福音書は、生誕物語(いわゆるクリスマス話)を欠き、このイザヤ書の言葉の引用で物語を始めている。クリスマス準備の季節から始まる教会の暦の初めの時に、「主の道を整え、その道筋をまつすぐにせよ」と心に響けることは誠にふさわしいと思う。アメリカを車で旅したとき、デスバレーという砂漠の公園の中、一本の道だけが限りなく真っ直ぐに伸びる景色が印象的で、思わず車を停めてその道に立った。そこは一切の範囲内に、自分とその道以外何も存在しない場所。視界イザヤの言葉からわたしがイメージするのは、いつもこの景色である。